メリッサ リタ 米国出身の元キリスト教徒

:

明:およそ27年 に渡る真の宗教の探索。いかに彼女がイスラ ムを 出したか。

目: 事新改宗者ムスリムの逸 女性

より: メリッサ リタ

日11 May 2015

集日 11 May 2015

私が育った家庭は、残念ながら家庭崩 していました。父は反宗教的で、母は 践的な南部バプテスト派でした。父方の家族において、宗教は嘲笑の的であり、 酒や 物によって酩酊することが「真っ当」な人 とされました。母方の家族において、宗教は「理解された」ものではありましたが、宗教的な会 は一切ありませんでした。母方の祖父は、一 は南部バプテスト派の 者でしたが、日曜の 教だけが信仰心を示す でした。

幼少（9 10 ）の から、私は「教会へ行くこと」が好きになり始めました。夏休みには「 の邪魔をしない限り」はバイブルスク ルに通うことが され、日曜日には「そこで温かい昼食が出る限り」は教会に通うことが されました。そこでは“Jesus Loves Me” や “This Little Light of Mine”などの歌を学びました。それは しく良い でした。私が12 になると、父は教会へ行くことを禁じてしまいました。日曜学校の授 は「真面目」になり ぎていたのです。そこでは 理について学び始めていました。 酒はダメ、 もダメ、 物は にダメ! 夫 に起きることに しては して言及してもなりませんでした。私はそうした 理を家に持ち り、 に蒙し始めました。それ以降、教会は禁止されてしまったのです。幸いにも、私はさらなる学びを欲する程度のことは学び えていました。

12 の半ばに、 が 婚しました。私は母と暮らし始め、その に真の宗教への探求が始まりました。私は 日曜日にペンテコステ派の教会に通うようになりました。そこでは、い

かなる服装をすべきか（ズボンを履いたり、化 をしたり、爪を切ることは されませんでした）、そしていかに歌うかを学びました。また、いかにバイブルを引用すべきかや、いかにイエスを崇 すべきか（神よ、私をお赦しください！ ）も学びました。そこでの「神の慈悲」の概念は 味をそそるもので、それは きの探求における初めての本当に重要なレッスンでした。それは べれば べるほど根本的におかしな概念でした。その概念とは、私たちは既に救われており、何をしても地 に行くことがない、というものでした。それはどう考えてもおかしなものでした。さらに、バイブルでは私たちの罪について言及されていません。そこには うべき戒律というものがないのです。善行を促す励みというものが存在しないのです。

私はその教会を去り、 の信仰を探し求めましたが、本能的に一神教にこだわりました。神こそが であり、イエスがどこかに わっているということを、私の魂は知っていました。私はユダヤ教を べてみましたが、それがイエスを完全に除外しているという事から、すぐさま 限りました。私はキリスト教の 宗派も べました。バプテスト派を　したところ、そこには慈悲という概念そのものがありませんでした。何か　ったことを行えば、救 や希望の余地なくすぐさま地 行きなのです。カトリック派についても べてみましたが、（マリア　神の慈悲が彼女にありますよう　を含む） 人への崇 が腑に落ちませんでした。またメソジスト派と 老派からも、　はありませんでした。やがて、彼らが救 の希望を くという理由だけで、ペンテコステ派教会に ってしまいました。

私をいつも ませた2つの大きな疑 がありました。1つ目は、もしイエスが神の子ならば、いかにしてそれと同 に神であることができるのか、というものでした。2つ目に しては１つ目と大きな いはありません。もしイエスが神その御方ならば、彼がゲッセマネの庭 で祈っていた 象は一体 だったのだろうか、というものです。私はこれらの疑 を牧に えたところ、こう言われました。「そのような　をするのであれば、信仰心の欠如から地 へ堕ちてしまいますよ。」私は　を受けました。ガリレオはこう述べています。「神は人 に感　理性 知性を授けておきながら、それらの活用の放 を意 したなどということを私は信じない。」私はペンテコステ派教会を去り、2度と りませんでした。

19 になると、私はモルモン教の2人の 道 に家の を きました。私は2人を家に招き入れ、勉 を始めました。これはなんて理にかなった宗教なのだろうと思いました。彼らは、イエスと神は同じ位格ではないと言いました。また、真の宗教においてひたむきに生きる人は天国の　を受け、重大な罪を犯した者でも、信仰心さえあれば一定期 の を受けるだけだと言いました。信仰者にとって、地 は永久のものではないと言うのです。また 言者たちについても り、モ ゼが最 ではないと言いました。そして彼らはイエスを し、彼らの 兄であると なしているものの、彼らの祈る 象は神であると言いました。それが真 であるかのように こえ、彼らの主 を に入りました。私は彼らの教会に入会し、16年 メンバ であり けました。

その16年 の中では、多くの困 を　しました。そして何度も宗教の 践を完全に止めてしまったこともあります。私はアルコ ル中毒になり、そういった人たちのよくすることを行いました。そして夫と 婚し、 々な男性とデ トし始めました。私は自分自身を めていたのです。ただ、信じる心は失ってはいませんでした。私はモルモン教が教えてくれたことを常に信じていました。私は自分の行いは清算されないものだと思い まされていました。地 とは、信じない人々のためのものだということで安心しきっていたのです。罪人であれ、死 に精神的な　に入れられ、そこで悔悟すれば天国に入ることができるのです。

その16年の にも、悔い改めて教会に通い出したこともあります。モルモン教会ではレッスンを重ねていくと、部外者である「探索者」や新改宗者らには知らされないようなことを耳にするようになります。それはたしか2003年末か、2004年の初 の でしたが、「神はどこかの惑星において人 の男性で、 なる神を崇 していた」という が私に「 示」されました。また、地球上のいかなる人 であれ、善行を んだ者なら正当な神になることができるというものもありました。これには少し　しました。しかしながら、私にとってモルモン教はそれ以外では精神的にも 理的にも最も正しいのではないかと感じていた宗教でした。 の神々の概念は、他の何かを意味しているはずだと自分に言い かせました。ただし、その「他の何か」が何を意味しているのかは全く分かりませんでしたが。

2004年の5月、再婚 に再び 婚した のある夜、インタ ネットで夜更かししていました。あるチャットル ムを れて、素晴らしいエジプト人男性と出会いました。彼の名はサ ミ でした。サ ミ はとても 切で、いつも 切な を展 させていました。それは初めての体 だったため、いつもオンライン上で彼のことを探していました。私たちは彼の 家、私の 家、そして家族について しました。私たちは将来に する や希望についても り合いました。また、神についての非常に一般的な概念の会 もしました。神についてはとても 繁に していました。私は神における根本的な信条が彼と同じであることを 出しました。2004年の8月になると、 婚について し合い始めました。その 、私は彼の宗教であるイスラ ムについて べ始めることにしたのです。

私は改宗するつもりは全くありませんでした。私はモルモン信者ではあったものの、局はキリスト教徒だったのです。そこでは、イエスや を否定することが、直ちに破 へとつながるのです。事 、私はそれが地 に永 に留まる唯一の理由であると 信していました。私はただ、彼の宗教を知ることによって、彼に不快感を与える事柄を避けることができるはずだと思っていただけでした。

サ ミ は、イスラ ムについて学 のある友人のアフマドを 介してくれました。彼は、私たちの が私に影 を与えるものであって欲しくはないと言いました。非常に多くの女性たちが、夫を 足させるためだけに改宗しています。私は神の特 について学び始めました。神は唯一であり、その被造物からは何ら必要としてはいないものの、あらゆる被造物は神を必要としているということ。また神は みはせず、生まれもしないこと。そして神に似通うものは何一つないということ。それらの概念を受け入れることは容易でした。私の魂はそれらの情 に りつきました。しかし改宗するとなると は でした。イエスと の概念の があったのです。それらを否定することなど、到底 理でした。

それから、 言者たちについて学びました。すべての 言者たちは同等の存在であること、そしてムハンマド（神の慈悲と祝福あれ）が最 の 言者であること。またイエス（神の慈悲と祝福あれ）は神の子ではなく、 言者であったこと。それらについてはほとんど がなかったので、サ ミ の友人はバイブルの中でイエス以外の 言者たちが「神の子」「神の唯一の子」「神の 男」と呼ばれている 所を示してくれました。彼は他にも、イ

エス自身が弟子たちに し、彼を神の子とは呼ばないよう戒めたこと、そしてイエスは自らを「人の子」と名 っていたことを指摘しました。それによって私の　の一部は解消されたのですが、モルモン教の 言者たちの　が残されていました。その　の解消は他よりも 分か困 でしたが、最 的には 似点ではなく、相 点に着目することになりました。バイブルの 言者たちは全人 への共通した教えを携えており、その教えは常に一 していました。つまり同位者なき神のみを崇めよ、というものです。
モルモン教の 言者たちの教えは、モルモン教会のみに してのもので、それは通常、食物の　や自立心に するものでした。それがひとたび指摘されると、私はどうして今までそこに 付かなかったのだろうかと不思 に思いました。

同じような 子で、7ヶ月 に及び新たな学びや（モルモン教 の）根 の反 がなされていきました。その期 でも、私は改宗などしないと言い り、サ ミ とアフマドも「分かっているよ」と言っていました。私はムハンマドへの 示を含む、彼らの主 の根 をバイブルから提示するよう要求し、彼らは　にそれらを示してくれました。さらに彼らは、ムハンマドの名前が一 はバイブルの中にあったものの、それが に 集され削除されたという事 も示しました。その名はアフマドで、ジョンとジャックが に入れ替えて使用されるのと同じように、それはムハンマドと同等の名とされています。そしてその名は削除されているものの、それ以外の部分は残されています。ムハンマドに してはイエス自身、そしてモ ゼによっても予示されていました。

2005年の3月、私は（キリスト教による）地 への恐れを解消し、心の底からイスラ ムを受け入れさせた最 のレッスンを いました。それは　についてでした。モルモン教徒として、私は　の存在を否定したのであれば、ただちに永久の地 が 命づけられるということを信じていました。何がどうあろうと、それに する悔悟の余地はないのです。ありがたいことに、私にはそうした存在を否定する必要がないどころか、 して否定することなどできないということが分かりました。私は「 なる魂」としても知られる　が、新旧において「主の魂」としても言及されていることを知ったのです。ここでも、彼らはバイブルからの典 を出してくれました。それは でも知っている逸 です。主の魂がマリアに れた、というものです。 なる魂、あるいは主の魂は、天使ガブリエルに他ならな

かったのです。そしてムスリムたちは天使たちの存在を信じています。神はガブリエルを介してムハンマドにクルア ンを 示したのです。

翌日、私はあるオンライン上の友人と し、彼女に改宗したい旨を えました。私はサ ミとアフマドにサプライズを用意したかったのです。彼女は 地のモスクに　してくれ、私のシャハ ダの に 人となってくれる2人のムスリム男性と1人のムスリム女性を私の家に向かわせる予定を入れてくれました。それはとても　でした。彼らはまず英 で信仰 言の意味を、そしてアラビア の本文を教えてくれました。それは「私は唯一なる神（アラビア でアッラ ）以外には神はなく、ムハンマドはその使徒であると 言する」といものです。ムスリム女性は私に最初のスカ フ（ヒジャ ブ）をくれ、それを改宗の として被せてくれました。

その夜、私はオンライン上でいつものようにサ ミ とアフマドに会いました。彼らは2人とも改宗の事 を非常に喜んでくれましたが、 いてはいませんでした。そのとき、以前私が「改宗などしない」と言っていた 、なぜ彼らがいつも「分かっているよ」と答えていたのかを知りました。つまり、ムスリムとは自らの意思を神の御意に服 する者のことをいいます。あらゆる子どもたちはそうした服 の状 で生を受けますが、　や 境といった外的な要因によってそうした状 から引き されてしまいます。それでも、私たちの魂は「神の御 」を い求め、服 の状 に立ち返ります。私の魂は1978年にその探求を始め、2005年の3月、34 にして遂に回 したのです。いわゆる「改宗」をしたのではありません。

さらに、私は改宗した直 にそれまでのあらゆる行いが精算されました。そこには善行を促す励みがあります。神は全知全能なのです。サ ミ と私は2005年の7月に 婚し、彼が私にイスラ ムを教えるという　を引き ぎました。学ぶべきことは、常にあるのです。

著作　2006-2015 断　を禁じます。　2006 - 2023　IslamReligion.com. 断　を禁じます。